

聖母マリアのカンティーガ (3)

— 巡礼がつどう聖地の調べ —

Las cantigas de Santa María, III,
La melodía de santuarios para los romeros

菊地章太*
KIKUCHI Noritaka

要旨

カステーリャ・レオン王国の王アルフォンソ10世は、カンティーガと呼ばれる詩歌を集成した。聖母マリアを讃えたその書物は『聖母マリア讃歌集』の名で呼ばれ、420篇におよぶ作品を収めている。抒情詩の表現にふさわしい文学言語として重んじられたガリシア=ポルトガル語で全篇がつづられ、カンティーガのひとつひとつに曲が附されて楽譜が中世の記譜法で記してある。それぞれの場面を表した多数の挿画が写本をかざっており、いずれも13世紀イベリアの信仰と芸術を伝える貴重な遺産となっている。アルフォンソ王の宮廷にはキリスト教徒とともにイスラーム教徒やユダヤ人の詩人・音楽家が活動していた。学芸への愛好にあふれた環境のなかで、アラビア語の抒情詩やイスラーム音楽を取り入れつつ聖母のカンティーガが語り出されたのである。

本稿は『聖母マリア讃歌集』のなかから次の5つの主題を考察の対象とし、それにふさわしいカンティーガを選んで読み解いていくところみである。第1章では聖母のカンティーガがめざしたものを明らかにし、詩の韻律形式とその抒情性の源泉を探っていく。第2章では聖母の奇跡を語るカンティーガを取りあげ、同じ主題をあつかったヨーロッパとほかの地域の文芸作品との比較をおこなう(以上前号)。第3章では聖母マリアの聖地にちなむカンティーガを取りあげ、奇跡の起きる場の生成過程を写本挿画の描写もまじえてたどる(以上本号)。第4章ではアルフォンソ10世の生涯を語るカンティーガをもとに、学芸への情熱を抱きつづけた王の挫折に満ちた歩みを詩句のなかに探る。第5章では聖母の祝祭のカンティーガをカトリック神学の視点から捉え、のちのスペイン・ポルトガルでさかんに信仰された聖母の無原罪御宿りの源泉を読み取っていく。以上の考察をもとに、聖母のカンティーガに現れた13世紀イベリアの信仰と芸術の諸相を明らかにすることをめざしたい。

キーワード：聖母マリア信仰 カンティーガ ガリシア=ポルトガル語 中世イベリア芸術 カトリック神学

*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

第3章 聖地巡礼のカンティーガ

1. 奇跡の生起するところ

紀元千年を過ぎたヨーロッパではようやく人の移動が活発になってきた。失われた聖地エルサレムを奪回するため十字軍が組織されたのは11世紀の末である。十字軍が東へ向かったように、イベリア半島の再征服をめぐり^{レコンキスタ}して西へ向かう動きもさかんになる。それと連動するかのようには半島の北西の果て、サンティアゴ・デ・コンポステラ Santiago de Compostela への巡礼が引きも切らず押し寄せた。キリストの弟子のひとり聖ヤコブの墓がそこにあるという。そうした伝説が語り出され、やがてそこは中世キリスト教世界で最大の巡礼地のひとつとなった⁽¹⁾。

地方ごとに独立して存在した聖地を結ぶようにして遠大な巡礼の道が形成されていく。それぞれの聖地には崇拜される聖者がおり、その聖者にまつわる奇跡が語られていた。中世の人々にしても奇跡が日常の出来事であるはずはない。それでも非日常の空間である巡礼の道は奇跡が現出する場となり得た。由緒ある奇跡が物語に登場するだけでなく、聖地ごとに続々と生起する奇跡が新たに語り出される。聖母のカンティーガもそうした新旧の物語を集積する媒体となったのである。そのなかから聖地巡礼にかかわる典型的な事例を2つ取りあげたい。

カンティーガ157番は南フランスの聖地ロカマドゥール Rocamadour にちなむものである。巡礼者の所持品をくすねた宿屋の女主人に罰がくだり、自身も巡礼におもむいて救われる話である。ここに示された奇跡物語は先行する作品が知られていない。末尾に「それはあまり古いことではない」*«non é muit' ancião»* とあるとおり、13世紀後半のカンティーガの作者にとってさほど時代を隔てないころの伝聞なのだろう。1172年に編纂されたラテン語の『ロカマドゥール聖マリア奇跡集』*Miraculorum sancte Marie Rupis Amatoris* は、南仏最大の聖地にまつわる奇跡を集成した書物だが、この話は収録されていない。おそらくはそれ以降に広まった話と考えられる。中世の巡礼聖地で発生した事件のいわば最新情報を伝える作品と言ってよい。

これと対照的なのが175番であり、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路上で起きた奇跡の物語である。宿屋の主人のたくらみで絞首刑にされた無実の巡礼者が聖母にささえられて生き延び、悪事の露見した主人が罰せられる話である。これにはひとつの重要な典拠とされてきた12世紀のラテン語文献がある。『聖ヤコブの書』*Liber sancti Iacobi* と呼ばれる大部な書物がサンティアゴ大聖堂に伝えられ、聖者の生涯を語る伝説や奇跡の数々、聖歌や巡礼路の案内などを収めている。この書物の奇跡物語から派生したらしい中世カスティーリャ語やフランス語その他の異本がいくつもあって、さまざまな言語による作品との比較対照が可能となる。

サンティアゴへ向かう道は、前述のとおり多数の巡礼聖地をつないでおり、そこにあまたの奇跡が語り継がれてきた。南フランスのトゥールーズ Toulouse の町を舞台にしたカンティーガ175番の物語も、その原型に類似するものが『聖ヤコブの書』に登場する。ここでは巡礼者の命を救うのは聖ヤコブその人である。ところが『讃歌集』でその役割をになうのは聖母マリアである。それはイベリアにおける聖母信仰の高揚を背景としており、信仰対象の変遷を知るうえでも興味深い。

さらに『讃歌集』はそれまでの伝統にしたがって舞台をトゥールーズに設定したが、やがて舞台は変遷し、北スペインのサント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダ Santo Domingo de la Calzada が奇跡の

場となっていく。いずれもサンティアゴ巡礼路上の町だが、聖地における奇跡伝承の取り込みがおこなわれたことを知るうえでも貴重な事例と言えよう。

2. 南フランスの聖地にて

『聖母マリア讃歌集』157番はロカマドゥールの聖母の奇跡の物語である。写本E (j.b.2) を底本とする校訂本からテキストと試訳を以下に示す⁽²⁾。

[題辞]

- 1 Como ùus romeus yan a Rocamador e pousaron en ùu burgo,
 - 2 e a ospeda furtou-lles da farÿa que tragian.
- どのようにロカマドゥールへ向かう巡礼たちがある町で宿泊し、
そこの女主人が彼らの携えてきた小麦粉を盗んだのか。

[反復句]

- 3 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão*
 - 4 *o que faz mal, e mui toste por ela o er faz são.*
- 神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ、
そして聖母を通じてすぐにまた正しい心に改めさせる。

[第1詩節]

- 5 E daquest' un gran miragre mostrou a ùus romeus
 - 6 que a Rocamador yan, que [de] ssa Madr' eran seus,
 - 7 e pousaron en un burgo, com' aprix, amigos meus ;
 - 8 mais a ssa ospeda foi-lles mui maa de cabo são.
 - 9 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*
- これについて、巡礼たちに偉大な奇跡が示された。
彼らはロカマドゥールに向かった。聖母のもとへと。
そしてある町に宿泊した。私が知るとおりわが友人たちである。
しかしそこの女主人がとんでもない悪さをしたのだ。
神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第2詩節]

- 10 Ca u eles lle compraron mui ben quantolles vendeu,
 - 11 de farÿa que tragian tal cobiiça lle creceu
 - 12 de feijoos que fezeran end', e un deles meteu
 - 13 y de bon queijo rezente, ca est' era en verão.
 - 14 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*
- 巡礼たちは〔宿で〕売られたものをきちんと支払ったのに、
女主人は彼らが携えてきた小麦粉が欲しくなった。
彼らはそれで揚げパンをこしらえ、そのなかのひとりが

新鮮なチーズをそこに加えた。それは夏のことだった。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第3詩節]

- 15 Ela con sabor daquesto da farÿa lles furtou,
16 e depois que ss' eles faron, log' a fazer sse fillou
17 feijoos ben come eles ; mais o demo a torvou,
18 que quis ende provar ùu, mais non lle sayu en vão.
19 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*

それが欲しさに女主人は小麦粉を盗んだ。

巡礼たちが旅立ったあと、彼らをまねて揚げパンを
すぐに作りはじめた。そこへ悪魔がつけいり、

[彼女は] さっそくひとつ食べようとしたが、うまくいかない。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第4詩節]

- 20 Ca u meteu un cuitelo no feijoo por provar
21 a come lle saberia, pela boca o cantar
22 foi ben ate enas cachas, que o non pod' en tirar,
23 ca lle passou as queixadas mais dun palm' e hũa mão.
24 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*

食べようとして揚げパンをナイフで刺したところ、
どうしたことか、口の中にナイフを突き刺してしまい、
柄まで突き出て、手のひらよりの幅よりも長く、
頬を突き通してしまったため、抜けなくなった。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第5詩節]

- 25 Muitos meges y vëeron, mais non poderon per ren
26 tira-ll' ende o cuitelo per arte nen per seu sen.
27 E ela, quando viu esto, a Rocamador foi-ss' en
28 rogar a Santa Maris, u acha todo crischão
29 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*

医者は何人も来たが、技能も知恵も役に立たず、
どのようにしてもナイフを抜くことができなかった。
それがわかると、彼女はロカマドゥールへ向かった。
聖マリアに祈るため。信者の誰もが求めるところへ。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第6詩節]

- 30 Bõo e toda crischãa que lle ben de coração



図1 エル・エスコリアル写本T第212葉裏 (Edición facsímil del códice T.I.1, 1979)

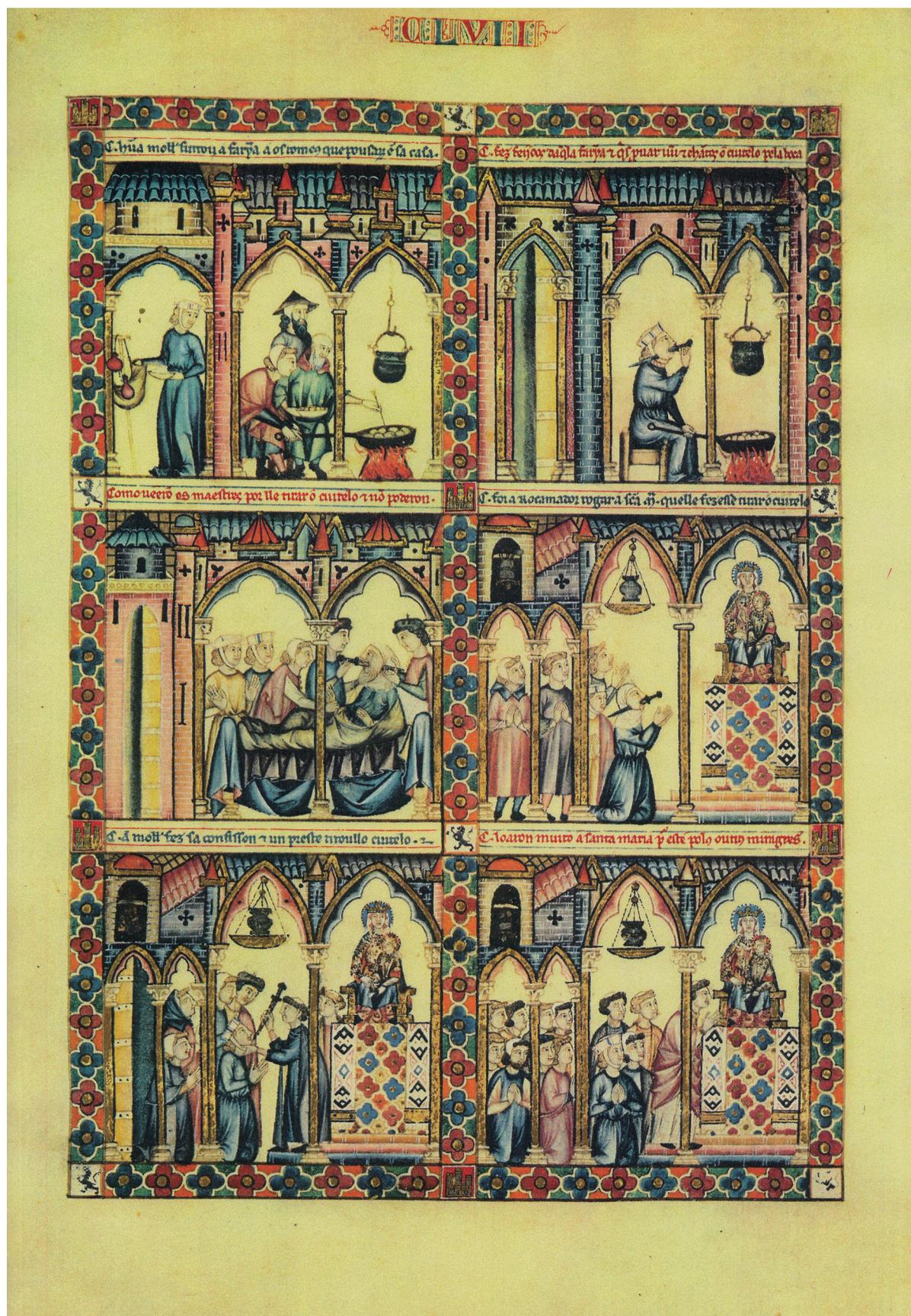


図2 エル・エスコリアル写本T第213葉表 (Edición facsímil del códice T.I.1, 1979)

31 roga mui gran piadade. Porend' esta foi enton
 32 y, [e] muito chorando ; e pois fez ssa confisson,
 33 tirou-ll' un prest' o cuitelo, ca non ja celorgião.
 34 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*

すべての善良なキリスト教徒は、心から哀れみを
 聖母に求める。それだから女主人は泣きながら、
 そこへ向かったのだ。そして罪を告白すると、
 司祭がナイフを抜いてくれた。外科医ではなく司祭が。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

[第7詩節]

35 Tan tost' aqueste miragre pela terra en redor
 36 souberon, e deron todos poren graças e loor
 37 aa Virgen groriosa, Madre de Nostro Sennor ;
 38 e sabede do miragre que non é muit' ancião.
 39 *Deus por sa Madre castiga a vegados ben de chão...*

たちまちにこの奇跡はその土地の周辺に知れわたり、
 誰もがみな聖母に感謝を示し、聖母を讃えた。
 栄光の処女、私たちの主の母を。

この奇跡を知るがよい。あまり古いことではないのだから。

神は聖母を通じて悪事を犯した者をきびしく懲らしめ……

中世の巡礼物語のなかには、宿屋の主人が悪巧みをして罪もない巡礼者が標的にされる話がいたって多い。ここでは女主人が悪事をはたらいてたちまちに罰がくだり、ロカマドゥールの聖母に救いを求めるといふ筋立てだった。ナイフが刺さったまま巡礼におもむく場面など荒唐無稽のきわみだが、現代とは異次元の世界の話だけにそのまま耳を傾けていきたい。

巡礼たちは「揚げパン」をこしらえたとある。原語のフェイジョ *«feijoo»* は現代ポルトガル語のフィリョ *filhó* のことだろう。オリーブ油で揚げたパンケーキで、ポルトガルの伝統的な菓子である。スペイン北東部のガリシア地方のフィジョア *filloa* も同じものをさす。そのガリシア出身のフィルゲラス・バルベルデはこれをブニユエロ *buñuelo* と解した⁽³⁾。小麦粉を溶いて揚げた団子のようなドーナツで、写本の挿画にはそれらしいものが描かれている⁽⁴⁾。

カンティーガ157番はエル・エスコリアル写本T (T.I.1) の第212葉裏から213葉表を占め、212葉裏の第1列に楽譜が掲載され、つづいて第2列の末尾まで詩句が記される [図1]。213葉表に挿画が配され、写本の1葉全部を使って6つの場面が展開する [図2]。最初の3場面は宿屋の内部、つづく3場面は教会の内部が舞台である。これまでと同じように、1段目の向かって左を第1場面とし、3段目の右の第6場面へ進んでいく。

第1場面には巡礼たちが大鍋で揚げ物をこしらえるようすが描かれている。鍋に浮かんだ団子を箸でころがし、揚げたてを皿に盛った。その脇でひとりの女性が客の方を気にしながら、旅行袋のなか

から小麦粉をくすねる最中である。宿屋の女主人であろう。立てかけた杖に瓢箪がぶらさがっており、中世の絵画や彫刻に見られる巡礼の水筒にちがいない。上段の文字は「どのように婦人が自分の家に泊まった巡礼たちから小麦粉を盗んだか」*«cómo hũa molleu furtóu a farÿa a os romeos que pousaron en sa casa»* とある。

第2場面には同じ大釜の前にすわる女性が描かれている。揚げ物はできあがったようだが、ナイフが口に刺さり、頬を突き抜けて先端が飛び出てしまった。上段の文字は「どのようにその小麦粉で揚げパンを作り、ひとつ食べようとして、ナイフが口に刺さったか」*«cómo fez feijoos d' aquela farÿa e quis provar ùu e chantós' o cuitelo pela boca»* とある。

第3場面には寝台に横たわる女性と介護にあたる人々が描かれている。男性ふたりが刺さったナイフを動かそうとしているが抜けそうもない。それにつきそう女性たちは心配しながらも、驚きあきれようすである。上段の文字は「どのように医師たちが来てそれを抜こうとしたができなかったか」*«cómo vëeron os maestros por lle tirar o cuitelo e non poderon»* とある。

第4場面には台座に据えられた聖母子像のもとに集まった人々が描かれている。その先頭で、口にナイフが刺さったままの女性がひざまづいて祈る。天井に灯油ランプが吊してあるから礼拝堂の内部だろう。上段の文字は「どのように彼女がナイフが抜けるように聖マリアに祈るためロカマドゥールに行ったか」*«cómo foi a Rocamador rogar a sancta Maria que lle fezesse tirar o cuitelo»* とある。

第5場面には聖母子像の前にたむろする人々が描かれている。女性の口からナイフが取り出された。ナイフを握る者は頭頂部を剃ったトンスラ *tonsurá* の姿なので聖職者にちがいない。ナイフが抜けてまわりの人々はよろこんでいる。上段の文字は「どのように彼女が告白をおこない、そしてひとりの司祭がナイフを抜いたか」*«cómo a moller fez sa confissón e un preste tiróull' o cuitelo»* とある。

第6場面には同じ聖母子像のもとでそろって手を合わせる人々が描かれている。ひざまづく信者の最前列にはナイフを抜いてもらった女性の姿がある。像の近くにるのは司祭や修道士であろう。上段の文字は「どのようにこの奇跡とほかの奇跡に対して人々が聖マリアを大いに讃えたか」*«cómo loaron muito a santa Maria por ést' e polos outros miragres»* とある。

3. 黒い聖母像の奇跡

ロカマドゥールの聖母像は南フランスから北スペインに多く見られる黒い聖母のひとつで、12世紀に造られた木製の像である。切り立った岩壁にへばりつくように礼拝堂や聖所が点在し、古くから伝説に彩られた聖地として知られた。

『讃歌集』にその地名が登場する作品は12篇ある。そのうち、聖地を直接の舞台とした奇跡が語られるのは、この157番に加えて8番と153番と343番の合わせて4篇である。また、ロカマドゥールへの巡礼者がほかの場所で遭遇した奇跡が語られるのは、22番と147番と159番と267番の4篇である。聖所の名だけが登場するのは、158番と175番と214番と217番の4篇である。

カンティーガ8番は題辞に「これはどのように聖マリアがロカマドゥールで、彼女の前で歌う遍歴芸人のヴィオルのところまで一本の蠟燭を降ろしたか」*«Esta é como santa Maria fez en Rocamador decender hũa candea na viola do jogar que cantava ant' ela»* とある⁽⁵⁾。これはシグラールのペドロ *«Pedro de Sigrar»* という遍歴芸人に起きた奇跡の物語である。

シグラールはドイツのケルン近郊の町ジーゲラー Siegeler である。ドイツ人なら名はペーター Peter だろう。「遍歴芸人」の原語はジョグラール «jograr» (カスティーリャ語のホグラール) である。これは中世フランス語のジョグレール jogler あるいはジョグレオール jogleor (現代フランス語のジョングルール jongleur) にあたり、語源は「芸人」を意味するラテン語のイオクラトール ioculator である⁽⁶⁾。吟遊詩人や吟唱詩人と訳されるトゥルバドゥール troubadour との違いはかならずしも明瞭ではない。本誌前々号で述べたとおりトゥルバドゥールは詩作する詩人である。かたやジョングルールは既成の詩を語り、踊りや大道芸もなりわいとした。聴衆の求めに応じて即興で歌を披露したりもする⁽⁷⁾。両者の境目は曖昧だが、トゥルバドゥールは詩作、ジョングルールは詠唱に重点があると言えるだろう。

遍歴芸人シグラールのペドロは「とても上手に歌い、巧みにヴィオールを奏でることができた。処女 [マリア] の教会ではどこでも同じように歌をいつも口ずさんだ」« [Pedro de Sigrar, que] mui ben cantar sabia e mui mellor violar, e en toda-las eigrejas da Virgen que non á par un seu lais senpre dizia» という。つづけて言う。

O lais que ele cantava era de Madre de Deus,
estand' ant' a sa omagen, chorando dos ollos seus ;
e pois diss' : Ai, Groriosa, se vos prazen estes meus
cantares, hũa candea nos dade a que cêemos.
彼が口ずさんだ歌は、神の母を歌ったもの。
その像の前で、目に涙を浮かべながら。そして語った。
「ああ、栄光の御方。私の歌があなたのよろこびとなるなら、
私たちのいるところに蠟燭を一本ください」と⁽⁸⁾。

遍歴芸人の歌に聖母は感じ、奇跡を起こしてこれに応えた。「彼のヴィオールのもとへ蠟燭を一本降した」«ouv', e fez-lle na viola hũa candea decer» という。ところが修道士が怪しんで蠟燭をもとの場所に戻してしまい、遍歴芸人を「術師」«sabedor» かと疑った。しかし蠟燭がふたたび降ってくると、それを見ていた人々は奇跡にちがいないと確信する。修道士は遍歴芸人のまえにひれ伏し、聖母の名において赦しを乞うた。それから毎年、遍歴芸人はロカマドゥールの聖母のもとに蠟燭を奉納しに来たという。

この物語はラテン語文献のなかに簡略な形態のものがある。『ロカマドゥール聖母奇跡集』に収められ、「ヴィオールの上に降った蠟燭について」«De cereo modulo qui super vidulam descendit» と題する。テキストと試訳を以下に示す⁽⁹⁾。

«[Petrus Iverni de Sigelar] qui, cum esset in basilica Beate Marie Rupis Amatoris, diuque psallendo fidibus requiem nullam daret, sed modulatis vocibus interdum instrumento concordans, sursum respexit : “Domina, inquiens, si tibi vel filio tuo Dominatori meo organica placent cantica, quodlibet ex cereis modulis hic sine numero et estimatione pendentibus deponens largire mihi”.

Cumcuc in hunc modum psallens oraret, et orans psalleret, videntibus qui aderant, modulus unus super instrumentum descendit.»

「[ジーゲラーのペトゥルス・イヴェルヌスは] ある日、ロカマドゥールの聖母教会を訪れ、長いあいだ倦むことなくヴィオルを弾き、ついで楽器の音に自分の声を合わせ、[像の方に]目をあげて言った。『ああ、至高の御方、もし私の音楽と歌があなたと主なる御子のお気に召したなら、その数や価値はわかりませんが、ここにさがっている蠟燭のひとつを私への授かりものにしてください』と。そして祈りを歌と、歌を祈りとひとつにした。すると蠟燭がひとつ彼の楽器の上に載るように降ってきたのを人々は目にした」

『ロカマドゥール聖母奇跡集』の編纂は1172年とされる⁽¹⁰⁾。したがって採録された奇跡物語の成立はそれ以前ということになる。1140年以降に編纂された『聖ヤコブの書』にはサンティアゴ巡礼の案内が含まれ、そこに「巡礼が訪れるべき聖ヤコブの道に眠る諸聖人の遺骸について」«De corporibus sanctorum que in itinere sancti Iacobi requiescunt que peregrinis eius sunt visitanda»と題する章があって、ロカマドゥールの近くを通る巡礼路上の聖所が記してある⁽¹¹⁾。しかしロカマドゥールの名はない。同地で聖アマドゥールの遺骸が発見されたのは1166年のこととされ、その数年後に奇跡集が編纂された。

ゴージェ・ド・コワンシーは中世フランス語の『聖母の奇跡集』*Les miracles de Notre Dame*においてこの物語を取りあげた。「聖母像の前でヴィオル弾きのヴィオルの上に降った蠟燭について」«Du cyerge qui descendi sus la vièle au vieleur devant l'ymage Nostre-Dame»と題し、357行もの長編に拡大させた⁽¹²⁾。これは12世紀の作品である。1世紀遅れるカンティエガ8番は51行の小品だが、ここでも情緒のある語り口が魅力である。

『讃歌集』のうちロカマドゥールを直接の舞台とする奇跡は、ほかに153番と343番に語られている。153番は題辞に「どのようにガスコーニュの婦人がロカマドゥールの聖マリア[の聖所]への巡礼を潔しとせず、自分の座る椅子が連れていってくれるのでなければ決してそこへは行かないと言い張ったか」«Como hũa moller de Gasconna, que desdennava a romaria de santa Maria de Rocamador, disse que, sse a alá non levass' hũa sela en que siia, que nunca yria alá»とある⁽¹³⁾。

ガスコーニュはロカマドゥールの南西にある地方で、そこに暮らす婦人がかたくなに巡礼をこぼんでいた。勧めてやまない召使いとのあいだに口論がはじまる。「そのときたちまち椅子が軽やかに持ちあがり、栄光の御方の祭壇にもとに降りた」«Ond' aquest' avêo en que logo s' ergia a sela ligureyramen. E ant' o altar deceu da mui Groriosa»とある。椅子が空を飛んだのだ。これぞ「術師」のしわざというほかない。もちろんこの言葉は使われておらず、あくまで聖母の起こした奇跡という設定である。

冒頭に「この出来事はずっと昔にガスコーニュで起きたこと」«Daquest' avêo assí, temp' á, en Gasconna»とある。フィルゲラス・バルベルデはガリシア地方に伝わる黒魔術 *nigromancia* とのつながりを指摘した⁽¹⁴⁾。その当否はともかく、話題としては新奇なものではない。オリエント世界に起源があることはまちがいなからう。

カンティーガ第343番は題辞に「どのように聖マリアが唾の悪魔に憑かれた少女を癒やし、彼女が話せるようになったか」«Como santa Maria de Rocamador guarriu hũa manceba demoniada de demonio mudo e fez que falasse» とある⁽¹⁵⁾。ロカマドゥールで起きた物語としてはほかの集成に採録されていないが、聖母伝や聖者伝にいくつも見られるやや類型的な内容である。やはり最初に取りあげた157番の物語はユーモラスなまでの奇抜さにおいてきわだっていた。

4. 生きつづける信仰

ロカマドゥールの聖母の信仰がイベリア半島で普及するうえで、1212年のラス・ナバス・デ・トロサ Las Navas de Tolosa の戦いがひとつの契機となった⁽¹⁶⁾。アル・アンダルスでキリスト教諸国の連合軍がイスラーム勢力を破り、以後のレコンキスタにとって決定的な転機となる。このときカステリーリャ＝レオン王国のアルフォンソ8世のもとに、ポルトガルのアフォンソ2世の軍隊やフランスの騎士団も集結した。ローマ教皇インノケンティウス3世もこの戦いを支援したため、教会の勝利とも位置づけられる。

この戦いよりも早くイベリアの西部、現在のポルトガルではロカマドゥールの聖母の信仰が浸透していたと考えられている。11世紀の末年にポルトガル北部のブラガ Braga に大司教座が置かれ、フランス人のベネディクト修道会士がつづけて大司教に就任した。いずれもロカマドゥールの信仰圏に属する地域の出身者である⁽¹⁷⁾。

聖アマドゥールの遺骸発見によってロカマドゥールへの巡礼がにわかに活気づくと、巡礼信心会や救護団体がそこかしこに組織され、ほどなくポルトガルにも導入される。第2代ポルトガル国王サンシュ Sancho 1世は、1192年にもとコインブラ司教区に属したソザ Soza の聖堂騎士団教会をロカマドゥール巡礼信心会にささげた。この会は巡礼者のための救護施設を拡大させていき、ポルトとリスボンおよびその周辺に病院や宿泊所を設置した。中世の救護施設はそのままでは存続していないが、そこに附属した教会や礼拝堂のいくつかは改築をかさねて今も機能している。ロカマドゥールの聖母像も同時期に造られ、各地で奇跡を起こす像として崇拝された。これもたびたび造り替えられたものがソザやギマランイス Guimarães、トーレス・ベドラス Torres-Védras、サンタレン Santarém、シャベス Chaves 等に現存している。

サンシュ1世のあと歴代のポルトガル国王によるロカマドゥール巡礼信心会への援助がつづけられ、アルフォンソ10世と同時代のアフォンソ Afonso 3世や次のディニス Dinis 1世の時代にはさらに大規模になった。後者の外祖父がアルフォンソ10世であり、作詩活動においても大いに影響を受けたことは本稿第1章に述べた。

歴代国王の事業はさらに進展していく。ディニス1世の王妃イザベル・デ・アラゴン Isabel de Aragão はポルトガルの社会福祉活動を代表する最初の人物とされ、聖女の称号を授かっている。1314年にミゼリコルディア Misericórdia と呼ばれる福祉事業をソザのロカマドゥールの聖母にささげた。彼女のはじめた事業は世紀を越えて1498年に再興される。リスボン大聖堂において新しいミゼリコルディアの会則が公布され、ポルトガル王室の保護のもとで多額の援助と特権があたえられた。大航海時代のはじまる時代のことである。海外の広大な植民地にも同じミゼリコルディアの組織がつくられた⁽¹⁸⁾。

長い中世が終わるころ、サンティアゴ巡礼も徐々に衰退していった。それはロカマドゥールの巡礼も同じだった。本国で信仰が忘れられていく近世以降においてもなお、ユーラシアの西のはずれの異郷においてロカマドゥールの聖母は崇拜を集めつづけた。それは社会が変わっていくなかでもつねに善行の実践と結びついてきたためではないか。ポルトガルにおいて絶えることなく継続したロカマドゥールの聖母信仰の揺籃期に、アルフォンソ10世のカンティーガが位置したのである。

5. 異端者のひそむ街

『聖母マリア讃歌集』175番はサンティアゴ巡礼路上の町トゥールーズで起きた聖母の奇跡の物語である。エル・エスコリアル図書館所蔵の2つの写本に伝えられているが、題辞に異同がある。写本T (T.II) には「これは息子とともにサンティアゴへ巡礼に向かったひとりの善人が不法にもトゥールーズで息子を絞首刑にされ、聖マリアが生き延びさせたこと」*« [E] sta e dū ome bõo que ya con seu fillo en romaria a Santiago e enforçarõll' a torto o fillo en Tolosa e Santa Maria deullo uiuo»* とある。カンティーガの本文には若干の文字の表記以外に大きな異同はない。写本E (j.b.2) を底本とする校訂本からテキストと試訳を以下に示す⁽¹⁹⁾。

[題辞]

- 1 Como Santa Maria livrou de morte ùu mancebo que enforcaron
 - 2 a mui gran torto, e queimaron un herege que llo fezera fazer.
- どのように聖マリアがひどい不法によって絞首刑にされた青年を死から解放し、そうしむけた異端者が火あぶりにされたのか。

[反復句]

- 3 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade,*
 - 4 *que sobr' el se torn' o dano de quen jura a falsidade.*
- 誠実な貴婦人、処女 [マリア] は正しくおられ、
いつわりを主張する者に報復をもたらす御方。

[第1詩節]

- 5 Desto direi un miragre de gran maravill' estranna
- 6 que mostrou Santa Maria por un romeu d' Alemanna
- 7 que a Santiago ya, que éste padron d' Espanna,
- 8 e per Rocamador vëo a Tolosa a cidade.
- 9 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

これについて、私は驚くべき大いなる奇跡を語ろう。

それは聖マリアがドイツからの巡礼者を通じて示されたこと。

スペインの守護者である聖ヤコブのもとに向かう巡礼者が

ロカマドゥールをへてトゥールーズの町にやって来た。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第2詩節]

10 El sobre toda-las cousas amava Santa Maria,
 11 e poren muit' ameude lle rogava e dizia
 12 que o d' oqueijon guardasse e seu fillo que tragia,
 13 pois que Madr' era de Cristo, que é Deus en Tríidade.
 14 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

その者はあらゆるものにまして聖マリアを愛し、
 それだからいつも彼女に祈り、そして求めた。
 連れてきた息子と自分を災難からお守りくださいと。
 三位一体の神であるキリストの母なのだから。
 誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第3詩節]

15 E pois entrou en Tolosa, foi llogo fillar pousada
 16 en casa dun grand' erege, non sabend' end' ele nada ;
 17 mas quando o viu a gente, foi ende maravillada
 18 e disseron ao fillo : «Dest' albergue vos quitade.»
 19 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

男はトゥールーズの町に入るとすぐ宿を見つけた。
 それとは知らずにとんでもない異教徒の宿屋を。
 だが人々はそれを見て、とても驚いて
 息子に告げた。「その宿屋から出なさい」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第4詩節]

20 O erege, que muit' era chëo de mal e d' engano
 21 e que muitas falssidades fazia sempre cad' ano,
 22 porque aquel ome bõo non sse fosse del sen dano,
 23 fillou un vaso de prata alá en ssa poridade
 24 *Por d[e]reito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

その異端者は悪意とうそいつわりに満ちており、
 毎年のように多くの悪事をはたらいていた。
 この善人がなんの被害もなくそこから立ち去れないよう、
 ひそかにそこにある銀の器をつかんだ。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第5詩節]

25 E meté-o eno saco do fillo ; e pois foi ydo,
 26 foi tan toste depos eles, metendo grand' apelido
 27 que lle levavan seu vaso de prata nov' e bronido ;

28 e poi-os ouv' acalçados disse-lles : «Estad', estade.»

29 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

息子の袋にそれをしのばせ、彼らが出発すると

急いであとを追いかけた。大声をあげながら、

新品の輝く銀の器を取っていったぞと。

彼らに追いつくと言った。「止まれ、止まれ」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第6詩節]

30 Os romeus, quand' esto viron, foron en maravillados,

31 ca viron viir o baile con seus omêes armados

32 que os prendeu, e tan toste foron ben escodrunnados,

33 ata que o vas' acharon no saqu', esto foi verdade.

34 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

巡礼者たちはそのさまを見て驚いた。

代官が武装した者どもと来るのを見たのだから。

者どもは巡礼者たちを捕らえ、すぐに取り調べて、

袋のなかから器を見つけた。そのとおりになったのだ。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第7詩節]

35 Tan toste que o acharon, o erege que seu era

36 jurou por aquele vaso e que llo furtad' ouvera

37 o moço que o tragia ; e a jostiça tan fera

38 foi de sanna, que tan toste diss' : «Este moç' enforcade.»

39 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

それを見つけるとすぐに、異端者は証言した。

この器は自分のもので、これを持っていた若者が

盗んだのだと。情け容赦のないこの裁き人は

激怒してすぐに命じた。「この若者を絞首刑にしろ」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第8詩節]

40 Os seus omêes cruees muit' aginna o fezeron

41 e da coita de seu padre sol mercee non ouveron ;

42 e depois que o na forca ante seus ollos poseron

43 el acomendou-l' a alma aa Sennor de bondade.

44 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

者どもは残酷にもすぐにそれを実行した。

父親の心痛を憐れむこともなく。



図3 エル・エスコリアル写本T第23葉裏 (Edición facsímil del códice T.I.1, 1979)



図4 エル・エスコリアル写本T第234葉表 (Edición facsimil del código T.I.1, 1979)

目の前で [息子が] 絞首台にかけられてしまうと
その魂を慈悲の聖母にゆだねたのである。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第9詩節]

45 E el foi-ss' a Santiago u avia prometudo ;
46 e depois aa tornada non lle foi escaecudo
47 d' ir u seu fillo leixara morto, que for a traudo,
48 e foy-o muito catando, chorando con piadade.
49 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

父親は誓ったとおりにサンティアゴへ向かった。
しかしその帰り道、だまされて死んだ息子を
そのままにしてきた所へためらわずに向かった。
哀れに思って泣きながら、ずっとその姿を見つめた。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第10詩節]

50 E u el assi chorava, diss' o fillo : «Ome bõo,
51 padre, e non vos matedes, ca de certo vivo sãõ ;
52 e guarda-m' a Virgen Santa, que con Deus see no trõo,
53 e me sofreu en sas mãos pola ssa gran caridade.»
54 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

父親が泣いていると、息子が話しかけた。「やさしい
お父さん、悲しまないで。私は生きているのだから。
神さまと玉座にいる聖なる処女 [マリア] が私を守り、
慈悲深く両手で私をささえているのです」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第11詩節]

55 Quando viu aquel coitado que seu fill' assi falava,
56 foi correndo a Tolosa e ao baile chamava,
57 a er chamou muita gente, que alá sigo levava
58 que vissen seu fillo vivo, que for a por crueldade
59 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

悲しんでいた父親は息子がそう話しているのを見て、
トゥールーズへ走って行き、あの代官を呼び、
いっしょに連れて行こうと、多くの人々を呼んだ。
無残な目にあわされたのに生きていた息子を見せるため。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第12詩節]

60 Posto na forca e morto ; mas non quis a Virgen Santa,
61 que aos maos abaixa e aos bõos avanta,
62 e o sofreu en sass mãos que non colgou da garganta.
63 E disse : «Amigos, ide taste e o descolgade.»
64 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*
絞首台にかけられ死んだはずが、悪人をおとしめ、
善人をひきあげる聖なる処女は、そうならないように
両手で息子をささえ、のどが締まらないようにした。
父親は言う。「友人たち、急いで行って降ろしてくれ」と。
誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第13詩節]

65 Foron-sse logu', e con eles foi seu padre o cativo
66 con coita d' aver seu fillo ; e des que llo mostrou vivo,
67 decendérono da forca, e un chorar tan esquivo
68 fazian todos con ele, que mester ouv' y : «Calade.»
69 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*
人々は急いで行き、悲しみに捕われた父親も
ともに行き、息子が生きていることがわかると
絞首台から降ろし、誰もが父親とともに大声で泣いた。
そのため [息子は] 言わねばならなかった。「静かに」と。
誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第14詩節]

70 E pois sse calad' ouveron, contou-lles todo seu feito
71 com' estedera na forca tres meses todos aeito,
72 u a Virgen o guardara, e a verdade do preito
73 lles disse, rogando muito : «O erege mi chamade,
74 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*
人々が静かにすると、息子はことの全容を語った。
まる三か月のあいだずっと絞首台の上にいること、
そこで処女 [マリア] が助けてくれたこと、そして事件の
真相を語って懇願した。「あの異端者をここに呼んでください。
誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第15詩節]

75 Que ascondeu no meu saco o vaso per que prendesse
76 eu morte crua e maa ; poren non quis que morresse
77 a Virgen Santa Maria, mas guisou-mi que vivesse ;

78 e porende as loores deste feit' a ela dade.»

79 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

あの男が私の袋に器を隠し、そうして残酷で不当な死を
もたらしたが、にもかかわらず私が死ぬのを望まない
処女聖マリアが私を生かしてくださった。それだから
この事実において、彼女に讃美をささげてください」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第16詩節]

80 E logo toda a gente enviaron a Tolosa

81 polo ereg' ; e pois vëo con ssa cara vergonnosa,

82 souberon del a verdade a morte perigoosa

83 lle deron dentr' en un fogo, dizendo-ll' : «Aqui folgade.»

84 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

さっそくみなであの異端者をトゥールーズから
連れてくると、男は恥さらしな顔をして現れた。
人々は真相を知り、火のなかへと恐ろしい死を
男にあたえて言った。「そこで楽しんでいろ」と。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第17詩節]

85 Esta jostiça tan bõa a Madre do Josticeiro

86 fez por aquel ome bõo mui leal e verdadeiro,

87 que lle deu seu fillo vivo, e o ereg' usureiro

88 ar fez que prendesse morte qual buscou por sa maldade.

89 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

正義の母 [マリア] はこれほどに良い裁きを
あの誠実で正直な善人のためにおこない、
息子を生かし、そして貪欲な異端者を
悪事によってみずから招いた死にさだめた。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

[第18詩節]

90 E por aquest' ai, amigos, demos-lle grandes loores

91 que semp'r' acorr' os coitados e parç' aos peccadores,

92 e a todos faz mercees, a grandes e a mēores ;

93 e porend' os seus miragres tan nobres muito loade.

94 *Por dereito ten a Virgen, a Sennor de lealdade...*

それだから、友人たちよ、大いなる讃美をささげよう。
彼女はつねに悲しむ人たちを慰め、罪びとを赦し、

あらゆる人に、身分の高い者にも低い者にも恵みをもたらす。

だから彼女の気高い奇跡を大いに讃えよう。

誠実な貴婦人、処女マリアは正しくおられ……

悪徳旅館の経営者があわれな旅人にぬれぎぬを着せる。旅人のかたわれが無理無体に処刑されてしまいが、聖母の奇跡の力で命をながらえるという筋立てである。この物語は中世からこのかた異本がすこぶる多い。サンティアゴ巡礼路上が舞台となつてからは、聖ヤコブがその救い手として定着していく。ここではその役割を聖母がになっていた。8行目に「ロカマドゥールをへて」*«per Rocamadour»* とあるが、この地名を出すのはこれが聖母奇跡物語の一環として語られるからにちがいない。

16行以下に「異端者」*«erege»* の語がたびたび登場する。舞台がトゥールーズであり、カンティーガが13世紀の作品であることを考慮すれば、これはカタリ派 *catharisme* の信者ということになる(20)。1056年の教会会議で異端とされたカタリ派は南フランスの大都トゥールーズを重要な拠点としていた。当時のパリがおよびもつかないほどの高度な文化をほこっていたこの町に、各地からトゥールバドゥールが集まり文芸の花を咲かせた。しかし異端宣告後に教皇庁の命令によって討伐軍が組織され、信者はトゥールーズの町を追われた。最後の砦となったモンセギュールが1244年に陥落したのち、1世紀あまりのうちに残党も掃討される(21)。したがって13世紀の時点では、トゥールーズと言えばカタリ派の異端者がひそむ町というイメージがいまだに払拭されていなかったろう。

31行目に「代官」*«o baile»* とある。37行目に「この裁き人」*«a jostça»* とあり、56行目に「あの代官を」*«ao baile»* とあるのも同一人物であろう。このことはエル・エスコリアル写本Tに描かれた挿画からも明らかである。

カンティーガ175番は写本Tの第232葉表~234葉表を占めている。232葉表の第1列から232葉裏第1列の途中まで楽譜が掲載され、つづいて233葉表の第2列末尾まで詩句が記される。233葉裏 [図3] から234葉表 [図4] まで挿画が配され、写本の見開き2葉にわたって12の場面が展開する。ここでは左ページ1段目の向かって左を第1場面とし、3段目の右を第6場面、右ページ1段目の左を第7場面、3段目の右を最終の第12場面と呼ぶことにしたい。

第1場面には山中を歩む巡礼の親子が描かれている。道は平坦ではない。両側は樹木に覆われた岩山で、木々のあいだに鳥が飛びかう。上段の文字は「どのようにひとりの男とその息子がサンティアゴへ巡礼に向かったか」*«cómo un omê e seu fillo ýan en romería a Santyago»* とある。

第2場面には室内の情景が描かれている。右側には食卓で飲食する巡礼の親子、左側には親子を気にしながら袋のなかに器を入れようとする男の姿がある。上段の文字は「どのようにトゥールーズの宿屋の異教徒が息子の食糧袋に銀の器を入れたか」*«cómo o herege de Tolosa do pousaron matéu un vaso de prata no fardel do fillo»* とある。

第3場面にはふたたび戸外の情景が描かれている。右側に巡礼をつづける親子、左側には馬上の人物に何事かを訴える男の姿がある。その周囲にいくたりかの人。上段の文字は「どのように異教徒が代官にふたりの巡礼が器を盗んだと告げに行ったか」*«cómo o herege foy dizer a o bayle como dos romeos lli furtaran o vaso»* とある。馬上の人物がここに言う代官にちがいない。

第4場面にはつづいて戸外の情景が描かれている。左側には馬上の人物が右手をあげて前方の巡礼を制する。ならんで馬を駆っているのは部下であろう。右側には何事かと振り返る親子の巡礼の姿がある。上段の文字は「どのように代官が巡礼たちを追いかけ、彼らに『止まれ、止まれ』と言ったか」*«cómo o bayle foy tras os romeos e llis disse «estade, estade»* とある。

第5場面には戸外のものものしい情景が描かれている。右側には槍を持った3人が訴え人の男とともにおり、袋のなかから器を取りだした。その左には袋を手にする巡礼の息子、ひざまづいて懇願する父親の姿がある。背後に馬に乗った3人の男たち。上段の文字は「どのように代官が息子の食糧袋を調べさせ、人々がそこから器を見つけたか」*«cómo o bayle fez catar o fardel do fillo et acharon y o vaso»* とある。

第6場面には刑場のようなすが描かれている。絞首台に息子が吊されており、その足を冠の女性が両手でささえる。聖母であろう。背後に天使がいる。その脇にひざまづく父親、右側には槍をかかえて引き上げていく人々の姿がある。馬上から振り返るのは、本文37行目以下に「情け容赦ないこの裁き人は激怒してすぐに命じた」とある代官にちがいない。上段の文字は「どのように人々が巡礼者の息子を絞首刑にし、聖マリアが彼を両手でささえたか」*«cómo enforcaron o fillo do romeo e sancta Maria o soteve nas mãos»* とある。以上が写本第233葉裏の挿画である。つづいて234葉表に進む。

1段目左の第7場面には教会内部の情景が描かれている。右側の半円アーチの下に豪華な祭壇があり、その下にひざまづいて祈る人物の姿がある。天上にはランプが灯る。上段の文字は「どのように父親がサンティアゴへの巡礼を果たし、そこで祈りをささげたか」*«cómo o padre compriu ssa romería a Santyago e fez ssa oraçón»* とある。

第8場面にはふたたび刑場のようなすが描かれている。絞首台にかけられた息子は冠の女性に両手でささえられ、目を見開いて左下にひざまづく父親を見つめる。両脇に羽を拡げた天使がかしづく。上段の文字は「どのように父親がトゥールーズへ戻り、息子のもとへ行き、無事に生きているのを見つけたか」*«cómo o padre tornóu a Tolosa e foy veer seu fillo e achóu-o viv' e são»* とある。

第9場面には家々がひしめく町のようなすが描かれている。右端に巡礼の父親、それに対するは馬上の人々は代官と部下たちであろう。父親は代官に向かって何事かを説明する素振りである。上段の文字は「どのように父親が代官に息子が絞首台の上で生きていることを告げに行ったか」*«cómo o padre o foy dizer o bayle cóm' estava seu fillo na forca vivo»* とある。この「代官」は第3場面以下に登場したのと同じ人物である。

第10場面には三たび刑場が描かれている。右端にいる馬上の代官の指図で部下たちが若者を絞首台から降ろすところである。その下によるこぶ父親の姿がある。上段の文字は「どのように代官がそこへ向かい、巡礼者を絞首台から降ろしたか」*«cómo o bayle foy aló e decéu o romeo da forca»* とある。

第11場面には第5場面と類似の情景が描かれている。両者は写本を見開いたとき対応する位置にある。ここでは広場の中央で人々に詰問されるのは、かつて巡礼の親子を訴えた男である。上段の文字は「どのように代官が異端者を捕らえに行き、その者がなした非道な行為を知ったか」*«cómo o bayle foy prender o herege e connocéu ssa trayçón que fezera»* とある。画面右端の一段高い位置からとなりの場面を注視する人物が描かれ、挿画の枠をまたいで次の場面につながる。

第12場面には同じく広場の情景が描かれている。材木を積み重ねた上に罪人を座らせて焚刑が執行

され、炎がまわって噴煙が立ちのぼる。人々が群がってそのようすに見入っている。上段の文字は「どのように人々はその異端者に対し、悪事に科するに値する死をあたえたか」«cómo deron a o herege morte qual merecéu pessa maldade» とある。

6. 物語の源泉と生成過程

このカンティーガの物語は『聖ヤコブの書』との関連が古くから指摘されてきた。第2書の奇跡集成第5章に対応する物語がある。サンティアゴ大聖堂に伝わる浩瀚な書物のなかでもこの話はほかを圧倒して普及していく。1263年に完成したボーヴェのヴィンケンティウス Vincentius Bellovacensis の『大いなる鑑』*Speculum maius* にその要約が示された⁽²²⁾。これ以降さまざまな聖者伝や奇跡集成に取りあげられ、近世以降は演劇や小説に翻案されている⁽²³⁾。

北スペインのサンティアゴ巡礼路上の町サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダにこの物語を記した写本が伝えられている。12世紀前半のものとするが、文献学的な精査をへたうえでの年代決定ではない。そのためか写本の発見から時間はたつものの従来あまり注目されてこなかった。1995年に聖フルヘンシオ神学研究所 Instituto teológico San Fulgencio の年報にトマス・ラミレス・パスクアル Tomás Ramírez Pascual が「聖ヤコブの奇跡と中世の口承伝統」と題する論文を掲載し、2004年にこれを補完する論文を発表した⁽²⁴⁾。ここには物語の生成過程を考えるうえで注目したい指摘がある。これはカンティーガの典拠の問題にもおよぶと思われる。

問題の写本はカルサダ大聖堂の古文書館が所蔵する写本第2番に該当し、『修道院長の書』*Liber abbatis* の総題を附した160葉からなる神学論集である。同じ町のフランシスコ会修道院が19世紀に廃絶した際に移管されたもので、修道院の創設者ベルナルド・デ・フレスネダ Bernardo de Fresneda が1568年に寄贈した書物の目録に記載がある⁽²⁵⁾。来歴に関してはこれ以上のことはわからない。写本の第65葉から67葉にかけて聖ヤコブの奇跡物語が13篇収録されており、そのうち最初の2篇がここでは該当する。以下に第1篇のテキストと試訳を示す⁽²⁶⁾。

«Quidan de Anglia ascenderunt beatum Iacobum ex voto visitaturi, qui transcurso itinere usque ad castrum quod Trium Castellum dicitur venerunt quod est circa Compostellam itinere duorum dierum et dimidium. Quo hospitantes ab hospie suo propter pecuniam suam insidias perpassi, cum ab illo inebrianti fuissent et firmiter obdormissent, prefectus hospes ciphum unum argenteum possuit in sacco cuiusdam pueri qui Hugonellus dicebatur qui ad adorandum cum patre suo venerat. Mane igitur illos insequentur cun ciphu illo primum eius sacco inveniebatur reducens omnibus illum bonis suis spoliavit et a pretore illius loci primum tanquam furto convictum suspendi imperavit. Quo suspenso, pater eius anxius [quia fraster erat] peregrinationis peregit et pro filio preces incessabiliter apostolo fudit. Interdum apostolum pro vindicta invocans ; interdum accusans quod hi ab iniquis [feri ita] sustinebat. Sexto autem die ad locum quo filius pependit cum sociis reversus invenit eum vivum nulla signa doloris neque angustie habentem sed Deum et sanctum Iacobum plenissime laudantem. Unus a pretore urbis liberatus, eum cuius dolo suspensus fuerat coram se licet ipse vindictam non requireret suspensum vidit.»

「イングランドの人たちが聖ヤコブに誓いを立てて船に乗り、道の先でトゥリア・カステラという村にたどり着いた。そこはコンポステラまで2日半の距離だった。宿屋の主人は彼らの所持金をねらって策略をめぐらせた。主人は彼らを酔わせてぐっすり眠らせ、父と巡礼に来たフーゴネルという若者の袋に銀の器を入れるために〔その手を〕使った。その後、主人は次の日の朝、彼らを追跡し、袋から器が見つかった者を捕らえ、その財産を略奪し、盗難の有罪が立証されたものとして絞首刑にすることを代官に要請した。若者は絞首刑にされた。しかし父親は巡礼者であったので、悲しみを抱いたまま巡礼をつづけた。息子のために使徒〔ヤコブ〕への祈りを絶やさなかった。そしていくたびか復讐を望み、極悪人どもがしたことに耐えている自分を責めた。しかし6日目に仲間とともに息子が絞首刑にされた場所に戻ると、息子が生きているのを認めた。苦しみも痛みのおもなかつたので、かえって神と聖ヤコブを熱烈に讃えるにいたった。そして町の代官によって解放され、復讐を求めはしなかつたが、〔息子を〕絞首刑にしようとだました者が絞首刑にされたのを見たのである」

ここでは巡礼はイングランドから来たとあり、舞台はトゥリア・カステラ Tria Castella である。かつてレオン León 大司教区にこの名で呼ばれる教会があった⁽²⁷⁾。宿屋の主人は彼らの所持金欲しさに酒を飲ませたという。悪事の目的と手段が示されている。「代官」と訳した «pretor» は行政官である。司法官でないことに注意したい。その後の展開はカンティーガの物語と大差ない。父親が6日目に戻ってみれば聖ヤコブのおかげで息子は生きており、宿屋の主人は絞首刑になったとある。

カルサダ写本の第2篇も同様の物語である。分量は第1篇の3倍近くもあり、個々の記述を増広しただけの箇所も少なくないが、大きな違いがいくつかある。冒頭に「どのようにテュートン人たちが聖ヤコブのもとへ行く誓いを立てたかを記憶すべきであろう。トゥールーズに着くと彼らは宿屋の主人に歓迎された」«Memorie est commendandum quosdam Theutonicos in voto habuisse sancti Iacobi limina adire. Qui apud Tolosam venientes a quodam divite in hospitio suscepti sunt» とある。巡礼はテュートン人すなわちドイツ人だという。舞台はトゥールーズに変わった。そのあと宿屋の主人が彼らを酔わせて旅行袋に銀の器をしのばせ、翌朝追いかけていくところは変わりがない。ところが次の場面で新たな展開がある⁽²⁸⁾。

«Facta igitur inquisitione duos, vedericet, patrem et filium in quorum mantica ciphum invenit, iniuste eos bona eorum rapiens ad publicum iudicium traxit. Qui quasi convicti licet negarent pene addicti sunt ; iudex tum pietatis gratia motus, alterum dimitti, alterum iubet ad supplicium adduci. Oh viscera misericordie. Pater volens filium liberare petit se adduci supplitio. Filius e contra : Non est, inquit, equum patrem pro filio tradi in mortis supplicium. Sed pro parte filius indicte pene subeat excidium. Oh venerabile certamen clementie. Denique invito parte filius obtinuit ut pro utroque suspendium mereretur. Questium est ita.»

「探索が行なわれ、ふたりにおおやけの裁きもたらされた。すなわち、父親と息子に対し、旅行袋のなかに器が見つかり、不正にも彼のすべての所持金が奪われた。有罪が立証され、彼らがそれを否定しても罪状が確定した。そのとき裁判官が同情してひとりを自由にさせ、もうひとりに刑を執行す

るよう命じた。ああ、慈悲の心よ。父親は息子を解放することを望み、自分に刑が執行されるよう求めた。反対に息子は言った。『父が子の代わりに処刑されるのは正しくない。子が父の代わり、あたえられた刑罰を受けるべきだ』と。ああ、なんと立派ないたわりよ。最終的に父親の望むところとならず、ふたりのうち息子が絞首刑を受けるにふさわしいとされた。そしてそのように実行された」

ここには「裁判官」*«iudex»* が登場する。司法手続きは機械的だが、温情措置が示される。「ああ、慈悲の心よ」*«Oh viscera misericordie»* とある。そこで親子はたがいをかばいあい、息子が進んで絞首台におもむいた。「ああ、なんと立派ないたわりよ」*«Oh venerabile certamen clementie»* とある。この話が聴衆をまえにして語られたなら泣かせどころとなる場面ではないか。カルサダ写本第1篇にも聖母のカンティーガにもない展開である。

このあと父親はサンティアゴ巡礼を果たし、36日後に戻ってみれば息子は生きている。聖ヤコブがささえてくれたという。父親は大急ぎで町へ行って人々を連れてきた。宿屋の主人のたくらみが露見し、「おおやけの裁きによって」*«reum communi examine»* 絞首刑が言い渡されたとある。ここには裁判官はもはや登場しない。最後に教訓が示されて物語が閉じられる。すなわち「この例話が語るのは、ひとりひとりがあらゆる詐欺に用心すべきことである」*«Isto exemplo dicitur unusquisque se ab omni fraude custodire»* という。

このカルサダ写本のあとに『聖ヤコブの書』の奇跡物語を置いてみれば、記述がさらに詳細になっただけで、基本的な筋立てはほとんど変わらないことがわかる。冒頭に「主の受肉の1090年に聖ヤコブのもとへ巡礼に向かったテュートン人たちの思い出を後世に伝えるのはよろこばしい」*«Memorie tradentur est quosdam Theutonicos sub peregrinationis habitu anno incarnationis Dominice millesimo nonagesimo ad beati Iacobi»* とある。ここでは事件の年が示された。彼らはトゥールーズの宿屋に泊まり災難に遭う。以下の展開は同様だが、先ほどの引用に対応する箇所を示したい⁽²⁹⁾。

«Facta igitur inquisitione, duos, in mantica quorum cyphum invenit, patrem videlicet et filium, iniuste eorum bona rapiens, ad publicum iudicium traxit. Iudex vero pietatis gratia motus, alterum dimitti, alterum ad supplicium iubet adduci. O misericordie viscera. Pater volens liberari filium, addicat se ad supplicium. Filius econtra : Non est, inquit, equum patrem pro filio tradi in mortis periculum, sed pro patre filius indicte pene subeat excidium. O venerabile certamen clemencie. Denique proprio voto filius pro liberatione patris dilecti sibi suspenditur»

「人々は彼らふたりを検査し、ひとりの袋から器を見つけると、父親と息子の財産を不当にも押収してふたりともに起訴した。裁判官はしかし寛容をもってひとりを釈放し、ひとりを刑場へ引いていくよう命じた。ああ、慈悲の心よ。父は息子を解放することを欲して刑場へ向かい、かたや息子は反対に、父が子のために命を失うのを正しくないことを考え、父に代わって刑罰を受けるのは自分だと考えた。ああ、なんと立派ないたわりよ。最終的に息子は父親が釈放されるようにとの自らの願いのものとに吊された」

感動の言葉が発せられる箇所などいずれもカルサダ写本と異ならない。このあとの展開もまた同様で、宿屋の主人を召喚する場面には裁判官は登場せず、おおよけの裁きによって幕が閉じられる。最後の教訓は、各人があざむかれないよう注意せよというのに加え、さらに別の教訓が示される。「かたや慈悲深く丁寧な親切を巡礼者に示すことに専念する者は、神が巡礼者のあたえる限りない栄光の褒美を得られるように」*«sed misericordiam et benignam pietatem peregrinis studeant impendere, quatinus inde premia eterne glorie mereantur ab eo accipere, qui vivit et regnat Deus per infinita secula seculorum»* とある。これはいかにも巡礼の終着点サンティアゴ大聖堂に伝わる書物にふさわしい結語と言えよう。

以上概観した3篇についてラミレス・パスクアルは次のような成立の順序を想定した。すなわち、カルサダ写本第1篇が最初に書かれ、ついで同写本第2篇、最後に『聖ヤコブの書』の奇跡物語が成立したとする。その根拠として注目されるのは司法制度のありようだという。宿屋の主人の陰謀で巡礼たちがあらぬ嫌疑をかけられたことに対し、官憲がどのように対応したかが問題となる。

カルサダ写本第1篇には行政官 *«pretor»* が登場した。ここでは裁判はおこなわれていない。みずから被害者を名乗る人物の主張が一方的に通って処刑が執行される。のちに偽証が明らかになると、当人に同じ刑罰が適用される。ラミレス・パスクアルによれば、ローマ法 *Ius romanum* が一般法 *ius commune* として西ヨーロッパで普及するのは十字軍の時代以後のことであり、それ以前に書かれた物語では司法にかかわる場面では地域ごとの現行法が適用されているという⁽³⁰⁾。

カルサダ写本第2篇には裁判官 *«iudex»* が登場した。有罪が立証された後に刑が確定している。そのうえで情状酌量がはかられ、被告同士が話しあうことも容認される。法律とその管理者が社会秩序を保証していた。そうした観念が根づいていく時代が背景にあるのだろう。教皇権が拡大し神聖ローマ帝国の権威が失墜しつつあるなかで、ローマ法の普及による秩序の構築が期待された時代であった。したがってこれは11世紀末につづく頃のことだという。『聖ヤコブの書』にはこの点での違いはない。第2篇を核として増広したものとラミレス・パスクアルは判断し、3番目に位置づけたのであろう。

ここでカンティーガ175番をかえりみれば、ここでは行政官としての「代官」*«baile»* が登場するだけである。この者が「裁き人」*«jostica»* という呼び名に置き換えられているが、物語のなかではただ激怒して一方的に絞首刑を言いわたしており、司法手続きをおこなう気配などない。カルサダ写本第1篇では宿屋の主人が悪事をたくらんだのは所持金の強奪が目的とされる。カンティーガでは主人は「異教徒」*«erege»* というだけで悪事を働く者と見なされている。この違いをのぞけば、カルサダ写本第1篇だけでカンティーガの源泉とするには十分である。裁判官が温情を示したり親子がかばいあうという物語の白眉と言うべき場面は出てこない。したがってカルサダ写本第2篇や『聖ヤコブの書』は直接の典拠にしているのではないか。

7. ロースト・チキンの鳴き声

トゥールーズの北西の町コーモン Caumont の領主ノンパール Nompars 2世が1417年に聖地を巡礼した。翌年『サンティアゴ・デ・コンポステラとフィニス・テーレの聖母への旅』*Voiatge a Saint Jacques de Compostelle et a Nostre Dame de Finibus Terre* を著した。巡礼路上の町から町への距離が記してある。ただそれだけの即物的な記述だが、ひとつだけ奇特新な見聞が挿入されている。「ナヘ

ラからサント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダまで4リウ（約20km）。そこでかつて大いなる奇跡が起きた」*«De Nagere à Santo Domingo de la Calzada : iiii. lieues, auquel lieu avint une foix jadis ung grant miracle»* とある⁽³¹⁾。ここで舞台はカルサダの町となった。以下のような内容である。

夫婦の巡礼が息子を連れてサンティアゴへ向かった。一泊した宿屋の女中が若者に心を動かしたが相手にされなかった。腹を立てた女中は宿屋にあった銀の器を若者の肩掛鞆 *«eschirpe»* にひそませた。翌朝、女中は器がなくなっていることを主人に告げ、巡礼たちが盗んだにちがいないと主張した。主人はあとを追いかけて器を見つける。息子は「法廷に」*«à le justice»* 連れていかれ、絞首刑の判決を受けた。夫婦は旅をつづけ、戻ってみれば息子は生きている。「ひとりの紳士」*«ung preudome»* がささえてくれたという。夫婦は裁判官のもとへ駆けつけた。ここからが新しい展開である。

«ils s'en alèrent au jutge, disant qu'il luy pleust fère descendre du gibet leur enfant, car il estoit vif. Et le jutge ne le vouloit jamès croire pour ce que estoit impossible. Et tout jour plus fort le père et mère afermer qu'il estoit ainxi ; et le jutge avoit fait aprester son disner où il avoit en l'aste au feu ung coli et une géline qui rosti estoient. Et le jutge vait dire qu'il croyoit ainxi tost que celle poulaille de l'aste que estoit près cuyte, chantessent, comme que celluy enfant fusse vif. Et encontinent le coli et le jaline sordirent de l'aste et chantèrent. Et lors le jutge fut moult merevillés et assembla gens pour aler au gibet. Et trouvèrent qu'il estoit veoir, et le mirent à bas sain et vif»

「夫婦は裁判官の所に行き、息子は生きているのだから絞首台から降ろして欲しいと言った。裁判官はそんなことはあり得ないとして信じようとしな。夫婦は本当のことだと一日中強硬に主張した。裁判官は夕食を準備させ、火にかけたフライパンで雄鶏と雌鶏を焼かせた。もしそのとおりなら「若者が生きているなら」焼きあがりそうなこの鶏が鳴くだろうと言った。すると雄鶏と雌鶏はフライパンから飛び出して鳴いた。裁判官は驚いて人々を集め、絞首台へ行かせた。人々は元気で生きている若者を見ると下に降ろさせた」

そのあと女中は捕まって自白し絞首刑にされた。そして「今も教会には裁判官の目のまえでフライパンから出て鳴いたのと同じ種類の雄鶏と雌鶏がおり、私がこの目で見たところ真っ白な鶏だった」*«Et encore ha, en l'eglize, ung coli et jéline de la nature de ceulx qui chantèrent en l'aste devant le jutge ; et je lez ay veuz de vray, et sont toux blancs»* とある。

ここでは宿屋の女中が悪事の張本人である。若者への思慕が憎悪に変じたあげくの犯行だった。このくだりは旧約聖書の「創世記」39章の物語が下敷きになっている。エジプトのファラオの侍従長プティファルの妻が、ヘブライ人の使用人ヨセフを誘惑したが相手にされず、残していった上衣をたてに不倫の罪をなすりつけた話である⁽³²⁾。「肩掛鞆」のことはあとで述べたい。縛り首になった息子をささえたのは「ひとりの紳士」とあるが、これは聖ヤコブにちがいない。話のクライマックスはローストされたチキンが鳴いたことである。この旅行記が書かれた14世紀においてもなおカルサダの教会では白い鶏を飼っていたという。なんとも息の長い話である。

14世紀以降もフランス各地の教会でこの物語が語り伝えられ、絵や彫刻に表された。巡礼の信心会

が注文したステンドグラスがいくつか現存する⁽³³⁾。ノルマンディ地方の町ルーアン Rouen のサン・トゥーアン Saint-Ouen 教会の作品は14世紀のものである。ブルゴーニュ地方の町シャティヨン・シュル・セーヌ Châtillon-sur-Seine のサン・ニコラス Saint-Nicolas 教会、イル・ドゥ・フランス地方の町トリエル・シュル・セーヌ Triel-sur-Seine のサン・マルタン Saint-Martin 教会の作品はいずれも16世紀のものである。17世紀以降は民衆版画がさかんに作られた⁽³⁴⁾。シャンパーニュ地方の町トロワ Troyes に伝わる作品では、巡礼姿の聖ヤコブ像のかたわらに絞首台にかけられた若者の姿があり、巡礼に詣でる両親や鶏も描かれている。

同じく舞台をカルサダ置いた物語は地元スペインでも語られた。1606年に刊行された修道士ルイス・デ・ラ・ベガ Luis de la Vega の『カルサダの聖ドミンゴの生涯と奇跡の物語』*Historia de la vida y milagros de Santo Domingo de la Calçada* に記されている。ここではフランス人の夫婦が息子連れてサンティアゴ巡礼に出かけ、カルサダの町に宿泊したとある。宿屋の主人の娘が若者に思いをかけたが振られてしまい、外套の「頭巾のなかに」*«en la capilla»* 銀の器を入れた。翌朝、娘は警吏*«justicia»* に訴えて若者は捕縛され、絞首刑を宣告された。「上訴は認められなかった」*«no se le admitio aplacion»* という。絞首台にかけられているあいだ、聖母マリアとこの町の聖者ドミンゴがともにささえてくれた。巡礼から戻った母親は、息子の訴えを聞いて代官のいる官舎へ向かった。つづけて言う⁽³⁵⁾。

«con apressurado passo se fue al corregidor de la ciudad, a dezirle lo que passaua. Estaua el corregidor, quando llego la muger, sentado a la messa, y en ella tenia puestos para comer vn gallo y vna gallina, no se si assados, o cozidos. Oyò con atencion lo que la muger dezia, y pensando que era antojo, o alguna ilusion nacida de la passion y amor de madre, le dixo, para despedirla : Que mirasse que aquello era engaño, y que assi podia viuir su hijo, como aquel gallo y gallina, que alli tenian assados, a punto de comer. En diziendo esto, saltaron el gallo y gallina viuos, vestidos de pluma blanca, como los que oy se muestran : y el gallo comẽço luego a cantar. Quedò el corregidor fuera de si de espanto, y sin passar adelante en la comida, salio luego de su casa, y juntando toda la clerecia y vezinos de la ciudad, fueron todos a donde estaua el moço colgado, el qual hallaron viuo y sano, de la misma suerte que quãdo alli lo auian lleuado.»

「母親は急いで町の代官のもとへ行って起きたことを語った。母親が到着した時、代官は食卓についており、焼いたか煮たかわからないが、雄鶏と雌鶏を食べる用意が調っていた。代官は母親の言ったことを注意深く聞き、それは思いつきか、はたまた母親の熱意と愛情のなせるまぼろしと見なし、追い出そうとして言った。「そんなものは思い違いに決まっている。おまえの息子が生きていたら、焼かれて食べるばかりになっているこの雄鶏と雌鶏も同じはずだ」と。代官がこう言った時、白い羽で覆われた雄鶏と雌鶏が元気よく跳ねあがり、今その姿を見せたかのように、雄鶏は鳴きだした。代官はたまげて食事を切りあげ、すぐに官舎を出て、町の聖職者と住人を集めた。みなで若者が吊されたところへ行くと、息子はそこへ連れてこられた時のままに生きて元気で見えた」

そこですぐさま若者を絞首台から降ろし、そろって聖ドミンゴの墓まで盛大な行列をおこなって神に感謝した。息子を両親にゆだねると、親子はふたたびサンティアゴへ向かった。町の人々は「奇跡を起こした雄鶏と雌鶏をかついで大聖堂までおもむき、そこで聖者の礼拝堂のまへの柵あるいは格子のはまった窓のところに放した。今日なお見られるとおりでである」«y tomando el gallo y la gallina del milagro los lleuaron a la yglesia mayor, y alli los pusieron delante la capilla del santo, en vna jaula, o ventana, con vnas verjas de hierro : como se vee el dia de oy» という。

物語の展開は14世紀のフランスの記録とまったく同じだが、世紀をへたのちの変化が細部に認められる。銀の器を隠したところはラテン語の文献では一貫して«mantica»とあった。この語は旅行用の袋と外套の両義があるが、いずれも袋の意味で用いられていた。ノンパールの旅行記に「肩掛袋」とある。原語の«eschirpe» (escharpe あるいは escherpe ともつづる) は肩から斜^{はず}に掛ける帯を語源とする⁽³⁶⁾。これはつまりショルダーバッグである。かたやルイス・デ・ラ・ベータは外套の意に解したのだろう。「頭巾のなかに」入れたというのは外套の頭巾にちがいない。

若者をつかまえたのは「警吏」だった。原語の«justicia»は後世のスペイン語では裁判官 juez を意味するが、ここでは捕縛に携わるので警官 policia に該当する。1517年に刊行されたトーレス・ナーロ Torres Naharro の戯曲集『プロパリアディア』*Propalladia*ではこの意味で用いられている⁽³⁷⁾。「上訴は認められなかった」とあるけれど実際には裁判はおこなわれていない。最後に母親が頼ったのはその土地の「代官」である。原語の«corregidor»は都市に派遣された国王任命の官吏のことで、王室代理官とも訳される。地域の行政にも司法にも携わった⁽³⁸⁾。小規模の村に配属されたのが«alcalde»で、カルデロン・デ・ラ・バルカ Caldéron de la Barca の名高い戯曲『サラメアの村長』*El alcalde de Zalamea*に出てくる「村長」がそれにあたる。治安や徴税に携わるだけでなく裁判権も有した。やはり16世紀の物語である。

登場人物は代官から裁判官へ、さらに王室代理官へと変化した。それぞれの時代を反映してのことだが、内容もさまざまなプロットが継ぎ足されてゆたかになった。しかし近世になって新たに加わったものはない。中世そのままの奇跡物語として発展を終えたのである。この話はそっくりそのままポルトガルに伝わった。北部の町ポルトの北にあるバルセロス Barcelos が舞台である。今もかの国ではあでやかに彩られた木製の鶏がいたるところで売られている。カンティーガに語られた物語は増幅をかさねた末に、イベリアの地で人々の生活に根づいた説話となったのである。

8. 港の聖マリアのもとへ

ロカマドゥールやサンティアゴ・デ・コンポステラとならんで『聖母マリア讃歌集』にしばしば登場する巡礼地のひとつに、サンタ・マリア・デル・プエルト Santa María del Puerto がある。アンダルシア地方の西南、大西洋に面した港町で、24篇ものカンティーガに歌われている。番号はすべて300番台である。これは本稿第2章で述べたとおり、もっとも遅い成立段階に属しており、しかもイベリア内部にかかわる作品が多数を占めるようになった時期に位置する。

「港の聖マリア」と名づけられたサンタ・マリア・デル・プエルト、現在はエル・プエルト・デ・サンタ・マリア El Puerto de Santa María すなわち「聖マリアの港」と呼ばれ、以下にプエルトと略称することもあるが、ここはアルフォンソ10世の生涯における重要な場所として知られる。王の一

生はこの『讃歌集』をはじめとして学芸の諸分野にわたるはなばなしい業績に満ちているものの、また前半生の輝かしい武勲にもかかわらず、後半生は苦難の連続だった。外交問題の破綻や親族の不和に加え、自身の身体の不調がたびかさなった。イスラームから奪回したこの美しい港町で、足の病に冒された王自身が奇跡の治癒を得ることになる。その顛末については王の生涯のカンティーガをたどる本稿次号の第4章であつかう予定なので、ここでは巡礼の聖地としての側面だけを取りあげたい。

プエルトの町はアンダルシア南部の平原をうるおしてカディス湾に注ぐグアダレーテ Guadalete 川の河口に位置する。ジブラルタルに近いこの地はもっとも早くイスラームの勢力圏に入った。カンティーガ328番に「セビーリャの王国にあるヘレスに近く、アルカナテと呼ばれたところ」*«preto de Xerez, que éste eno reino de Sevilla un logar que Alcanate soya seer chamado»* とある⁽³⁹⁾。アルカナテの地名のもととはアラビア語の al-Qanātir で「橋」を意味する⁽⁴⁰⁾。塩の積み出しで栄えた港として知られた。

アルフォンソ王は父フェルナンド3世の意志をついでアフリカ遠征をくわだて、1260年にこの港に船団を集結させた。同じ328番に「かつてこの良き場所にドン・アルフォンソ王は滞在した。それは誇り高い偉大な町サレに侵攻する艦隊を送ったときだった」*«Ond' en este logar bõo foi pousar hũa vegada el rey don Affonso, quando sa frota ouv' enviada que Çalé britaron toda, gran vila e muit' onrrada»* とある。このとき王は隣接する港湾都市カディス Cádiz を併合し、アルカナテの名を「港の聖マリア」に変えた。「聖なる処女 [マリア] がそうしたのだ」*«esto fez a Virgen santa»* と語られている。艦隊は夏の終わりに出航し、モロッコの海港サレ Salé を攻略して秋に帰還した。のちに王はこの地に教会を建立する。カンティーガ398番は次のように歌う⁽⁴¹⁾。

Ali el rey don Afonso de Leon e de Castela
 fez fazer ùa igreja muit' aposta e mui bela,
 que deu a santa Maria por casa e por capela,
 en que dela foss' o nome de muitas gentes loado
 そこにレオンとカステイリャの王ドン・アルフォンソは
 気高くそして美しい教会を建てさせ、
 建物と礼拝堂を聖マリアにささげた。
 この聖所で多くの人々が彼女の名をたたえている。

プエルト市内のグアダレーテ川の河口近くにサン・マルコス城 Castillo de San Marcos と呼ばれる城郭のよう建物がある。メスキータ mezquita すなわちイスラームのモスクを教会に造り替えたもので、後世に増築がかさねられた。これがカンティーガに歌われた聖マリアの教会である。367番に「その場所に必要とされる塔と壁で囲まれていた」*«de torres e de muro cercada segund' aquel logar mester avia»* とある⁽⁴²⁾。4基の塔を備え頑強な壁をめぐらせており、地中海沿岸に数多く見られるいわゆる要塞教会 *iglesia fortaleza* にほかならない。その建設のさなかにも聖母は数々の奇跡を起こした。

カンティーガ356番は題辞に「どのように港の聖マリアが人々が建立していた教会の建物のために

グアダレーテ川を通じて木の橋をもたらしたか」*«Como santa Maria do Porto fez vir a ponte de madeira pelo rio de Guadelete para a obra da igreja que faziam»* とある⁽⁴³⁾。石材は豊富でも木材の不足する土地である。聖母は洪水を起こして木の橋をまるごともたらした。そのおかげで建設は工期通りに終了したという。358番は建設現場に搬入された巨大な石材に聖母がふさわしい場所をあたえたことを語る⁽⁴⁴⁾。また364番は工事中に起きた塔の崩落から作業員が救われた次第を語る⁽⁴⁵⁾。こうしていくつもの奇跡をへて完成した聖母の教会は、ほどなく巡礼の聖地として知られるようになったのである。

中世の人々が奇跡に期待したものはじつに多様であって、その解明は宗教史の重要な課題だが、イベリアに限っていえばモーロ人 *moros* と呼ばれたムスリムに捕らわれた者の解放が目立つ。11世紀の聖者シロスのドミンゴ *santo Domingo de Silos* の起こした奇跡として語られるのはほとんどがモーロ人からの解放である⁽⁴⁶⁾。聖母のカンティーガのなかでは海難事故の救助の話が少なくない⁽⁴⁷⁾。だが圧倒的に多いのは難病の治癒である。これこそ人々が巡礼に旅立つ動機の最たるものだった。

プエルトにかかわるカンティーガ24篇のうち奇跡の治癒を語るものは11篇におよぶ。病気が8篇(357番、367番、368番、372番、378番、389番、391番、393番)と怪我が1篇(385番)あり、さらに死者の蘇生1篇(381番)と家畜の治癒1篇(375番)が含まれる。治癒の対象はさまざまだが注目したいものがふたつある。ひとつは狂犬病であり、もうひとつは身体の障害である。

狂犬病 *«ravia»* の治癒を語るカンティーガは『讃歌集』に5篇(223番、275番、319番、372番、393番)あり、最後の2篇はプエルトにかかわる。372番は題辞に「どのように狂犬病の婦人がニエブラから港の聖マリア [の聖地] を訪れ、聖マリアが夜中に現れて彼女を癒やしたか」*«Como veio hũa muller de Nevra, que ravia, a santa Maria do Porto, e apareceu-lle santa Maria de noite e guareceu-a»* とある⁽⁴⁸⁾。また、393番には症状の記述があって、「狂犬病は鬱病に由来し、暗鬱で強固で激烈で悪性の病で、そのすべてが悪魔のうちに潜んでいる」*«enfermidade ravia de melancolia ven que é negra e forte e dura e de perfia, tod' aquesto á no demo»* とある⁽⁴⁹⁾。今ではウイルス性の疾患であることが明らかだが、精神錯乱をとまなう症状が悪魔憑きを連想させたのか。それならば聖母や聖者の力に頼るしかなかったろう。

身体の障害にかかわるものは2篇(357番、391番)あり、いずれも手足が不自由だった人の治癒が語られている。そのひとつ、カンティーガ391番は両脚がひどく曲がった少女の話である。父親は娘を治したい一心でプエルトまで歩いてきた。港の聖マリアにすがる思いで祈りつづけたある夜のこと、ついに奇跡が起きた。以下にテキストと試訳を示したい⁽⁵⁰⁾。

[題辞]

- 1 Como Santa Maria do Porto corregeu hũa moça
- 2 contreyta dos nenbros que levaron alá en romaria.
 どのように港の聖マリアがその地に巡礼に連れてこられた
 両脚の不自由なひとりの少女を治したのか。

[反復句]

- 3 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver,*

- 4 *ben outrossi pod' os nembros dos contreytos correger.*
 栄光の主が死者をよみがえらせることができたように、
 マリアもそのように不自由な脚を治すことができた。

[第1詩節]

- 5 Desto direy un miragre que eno gran Porto fez,
 6 que é seu desta reynna gloriosa de gran prez,
 7 a ùa moça que vêo y contreyta de Xerez,
 8 que bêes assi naçera, segun que oý dizer.
 9 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

これについて高貴な栄光の後〔マリア〕のものである
 大いなる港において、彼女がおこなった奇跡を語ろう。
 語られたのを私が聞いたところでは、ヘレスで生まれ、
 そこから来た体の不自由な少女に起きたことである。

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第2詩節]

- 10 E esta en tal maneyra os pees tortos assi
 11 avia : o qu' é adeante, atras, com' eu aprendi,
 12 tragia. Poren seu padre en romaria ali
 13 a troux' e teve noveas por daquel mal guareçer.
 14 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

私が知ったように、その少女の両脚は曲がっており、
 前にあるべきところが後ろについているほどだった。
 それだから父親は少女をそこへ巡礼に連れてきて、
 その病を治すためにノヴェナの祈りをおこなった。

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第3詩節]

- 15 Ond' avêo ùa noite que gran door a ffillou
 16 aos pees en dormindo, e tan toste despertou ;
 17 e a door foi tan grande, e tan forte braadou,
 18 come se ferida fosse ou que cuydass' a morrer.
 19 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

そこである夜に起きたことには、眠っていたとき少女の
 両脚がひどく痛みだし、すぐに目が覚めてしまった。
 痛みはあまりに激しく、少女は大声で泣き叫び、
 傷ついたあまり、あるいは死ぬかと思うほどだった。

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第4詩節]

20 E seu padre, que jazia sabo dela, preguntar
21 lle foi por que braadara ; diss' ela : «Porque britar
22 me foi os pees a Virgen e tornou-ss' a sseu altar,
23 e ouve door tan grande qual nunca cuidei aver.»
24 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

少女のかたわらに寝ていた父親が、なぜ泣くのかと
たずねると、少女は言った。「処女 [マリア] が
私の両脚を折り曲げ、私を彼女の祭壇に向かわせ、
考えたこともないほどの痛みを感じたからです」

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第5詩節]

25 Logo foron ajuntados quantos y eran enton,
26 e os pees lle cataron e víronos de ffeyçon
27 que os a têer devia, e tan ben sãos que non
28 podian mellor see-lo. E porende bēeyzer
29 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

そのときそこにいた人がみなすぐに集まってきて、
少女の両脚を調べ、そして両脚があるべきように
なっているのを見て、そしてそれ以上にはないほど
よくなっているのを見たのである。そこで人々は、

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第6詩節]

30 Se fillaron a reynna que taes miragres faz,
31 e cada ùu chorando poso en terra sa faz,
32 dizendo : «Bēeyta sejas, ca toda mesura jaz
33 en ti e toda merçee pora nos sempr' acorrer.
34 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

そうした奇跡をおこなう后 [マリア] を讃えはじめ、
誰もが涙を流し、額を地面につけて言った。

「あなたを讃えましょう。いつも私たちを助けるために
あなたが示してくださるあらゆる哀れみと恵みに対して。

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

[第7詩節]

35 Onde de damos loores com' a tan bōa Sennor
36 que perdōas os peccados e sãas toda door ;
37 e porende te rogamos que, sse ta merçee for,

38 que no santo parayso nos façás tigo caber.»

39 *Como pod' a Gloriosa os mortos fazer viver...*

それだから、罪をゆるし、あらゆる痛みを癒やしてくださる

善意にあふれた貴婦人であるあなたに讃美をささげます。

あなたの恵みがあるならば、私たちがあなたといっしょに

聖なる神の国に行かれるようにしてくださることを祈ります」

栄光の主が死者をよみがえらせることができたように……

少女は「ヘレス」《Xerez》の町から来たという。プエルトの北西、現在のヘレス・デ・ラ・フロンテラ Jerez de la Frontera である。プエルトまでは40キロ近い距離がある。そこを歩いてきたのだ。教会に到着するとすぐに「その病を治すためにノヴェナの祈りをおこなった」《teve novas por daquel mal guarecer》とある。ノヴェナ novena（ここには《novas》とある）は9日のあいだ祈りつづけること、つまりおこもりの祈禱である。

アルフォンソ王の在世中にカスティーリャ・レオン王国に編入されたサンタ・マリア・デル・プエルトは、たちまちのうちに奇跡の治癒をもたらす聖地となって巡礼を惹きつけた。そして『讃歌集』の編纂が進むなかでいくつものカンティーガに歌われるにいたった。これはイスラームからの奪回にはじまり、教会建設の途上で奇跡がくりかえされたことが最初の契機となったことはまちがいない。

カンティーガの数が増大するにつれ、イベリアの内部をあつかう作品が増えていくことは第2章で述べた。本章の範囲でもロカマドゥールはピレネーの彼方にあり、サンティアゴはイベリアの枠を越えたヨーロッパ規模の巡礼地だった。アンダルシアの港町が聖地としてにわかには脚光を浴びていく背景には、人々の目が、そして何よりも王の目が内向きになっていく視線の変化もあったにちがいない。さらに教会が完成してまもなく王自身の病が聖母の力によって癒えたことは、こうした傾向に大きくかわるであろう。それは次の第4章でたどりた。

注

- (1) 拙著『奇跡の泉へ — 南ヨーロッパの聖地をめざして』サンパウロ、2006、p.30.
- (2) cantiga 157 : ms.T.157, fol.212vo, pl. fol.213ro ; ms.E.157, fol.152vo-153ro ; El marqués de Valmar (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, II, Real Academia Española, Madrid, 1889, pp.229sq. ; Walter Mettmann (ed.), *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, II, Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1961, pp.151sq. ; id., *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, II, Editorial Castalia, Madrid, 1988, pp.151sq. ; Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, I, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, pp.388sq.
- (3) José Filgueira Valverde, *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María : códice rico de El Escorial, ms. escurialense T.I.1*, Editorial Castalia, Madrid, 1985, p.263. ブニユエロは14世紀のカスティーリャ語の文献にすでに現れる。揚げ菓子を意味するカタルーニャ語の《bunyol》やフランス語の《beignet》と同語源とされる。Joan Corominas, *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Gredos, Madrid, 1983, p.111.
- (4) 次の写本複製本をもとに記述をおこなう。 *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María, edición facsímil del Códice T.I.1 de la Biblioteca de San Lorenzo el Real de El Escorial, siglo XIII*, Edilán, Madrid, 1979.

- (5) Mettmann, *op. cit.*, ed.1959 I, 26 ; ed.1986, I, 77.
- (6) Oscar Bloch et Walther von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses Universitaires de France, Paris, 6 e éd., 1975, p.351.
- (7) Jean Rychner, *La chanson de geste : Essai sur l'art épique des jongleurs*, Droz, Genève, 1955, p.17. ジョングレールの活動に関する基本文献としては次のものをあげるにとどめたい。Edmond Faral, *Les jongleurs en France au moyen âge*, Honoré Champion, Paris, 1910.
- (8) 4行目に «hũa candea nos dade a que cēemos» とあるのをラウラ・フェルナンデスは「夕食を取ることができるように蠟燭を一本ください」«dadnos una candela para poder cenar» と訳した。フィルゲラス・バルベルデも同様に解する («dadme una candela, para tener con que cenar»)。いずれも «cēemos» を「夕食を取る」を意味する動詞 «cēar» の活用形と捉えたのである。エル・エスコリアル写本Tの中世カステイーリャ語注記には「私たちのいるところに蠟燭を一本ください」«dandos una candela a que estemos» とある。これは動詞 «seer» の活用形 «seremos» と捉えたのだろう。ここでは後者にしたがう。Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, I, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, p.388 ; Filgueira Valverde, *op. cit.*, p.262 ; Mettmann, *op. cit.*, ed.1986, I, p.325.
- (9) Edmond Albe (éd.), *Les miracles de Notre-Dame de Rocamadour au XII^e siècle*, Honoré Champion, Paris, 1907, pp.128-130 ; complément par Jean Rocacher, *Le Pérégrinateur*, Toulouse, 1996, pp.142-145.
- (10) Albe, *op. cit.*, p.12 ; Jean Rocacher, *Rocamadour et son pèlerinage: Étude historique et archéologique*, Edouard Privat, Toulouse, 1979, p.37.
- (11) Jeanne Vielliard (éd.), *Le guide du pèlerin de Saint-Jacques de Compostelle*, Protat Frères, Macôn, 1978, pp.48sq. ; Klaus Herbers y Manuel Santos Noia (ed.), *Liber sancti Iadobi, Codex Calixtinus*, Edita Xunta de Galicia, Santiago de Compostela, 1998, pp.241sq.
- (12) L'abbé Poquet (éd.), *Gautier de Coincy, Les miracles de la Sainte Vierge*, Parmantier et Didron, Paris, 1857, col.313-322
- (13) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, pp.142sq. ; ed. 1988, II, pp.142-144.
- (14) Filgueira Valverde, *op. cit.*, p.257.
- (15) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, pp.230sq. ; ed. 1989, III, pp.194sq.
- (16) José-Julio Gonçalves Coelho, *Notre-Dame de Roc-Amadour en Portugal, son culte, hôpitaux et hôtelleries*, Imprimerie Roche, Brive, 1912. p.41.
- (17) *ibid.*, p.42. ロカマドゥールの位置するケルシー Quercy 地方の名家の出身で、モワサック Moissac のベネディクト会修道士であった聖ジェロー saint Géraud は1096年から1109年までブラガ大司教を務めた。またケルシーに隣接するリムーザン Limousin 地方の出身で、ユゼルシュ Uzerche のベネディクト会修道士モーリス・ブルダン Maurice Bourdin は1097年から1100年までコインブラ司教を務め、1100年から1119年までブラガ大司教を務めた。*ibid.*, pp.50sq.
- (18) 拙著『姿を変えたキリスト — みなし子を育てたシスターたち』春秋社、2015、pp.35sq.
- (19) cantiga 175 : ms.T.175, fol.232ro-233ro, pl. fol.233vo-234ro ; ms.E.175, fol.165ro-166vo ; Valmar, *op. cit.*, II, pp.247-250 ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, p.187-190 ; ed. 1988, II, p.183-186 ; Laura Fernández et al. *op. cit.*, pp.416-419.
- (20) Laura Fernández et al., *op. cit.*, p.416.
- (21) 拙著『魔女とほうきと黒い猫』角川ソフィア文庫、2014, pp.138sq.
- (22) Vincentius Bellovacensis, *Speculum historiale*, IV, xxvii, 30, "Libellus miraculorum sancti Jacobi apostoli a Calixto papa compilatus", *Patrologia latina*, CLXIII, Apud Migne editorem, Paris, 1892, col.1371.
- (23) Filgueira Valverde, *op. cit.*, p.288 ; Xosé Ramón Mariño Ferro, *Leyendas y milagros del camino de Santiago*, Ellago Ediciones, Pontevedra, 2011, p.166 ; ホセ・ラモン・マリニョ・フェロ著、川成洋監訳、下山静香訳『サ

- ンティアゴ巡礼の歴史 — 伝説と奇蹟』原書房、2012、p.226.
- (24) Tomás Ramírez Pascual, “Los miraglos de Santiago y la tradición oral medieval”, *Scripta fulgentina, Revista de teología y humanidades*, V, Murcia, 1995, pp.423-434 ; id., “Miragros de peregrinos a Santiago, Edición, traducción y estudio de la narración de varios «Miragros de peregrinos» conservada en un códice del Archivo de la catedral de Santo Domingo de la Calzada”, *Berceo, Revista riojana de ciencias sociales y humanidades*, CXLVI, La Rioja, 2004, pp.109-136.
- (25) Ramírez Pascual, *Scripta Fulgentina, op. cit.*, p.425 ; id., *Berceo, op. cit.*, p.111.
- (26) id., *Scripta Fulgentina, op. cit.*, p.428 ; id., *Berceo, op. cit.*, p.117.
- (27) Henrique Flórez, *España sagrada, Teatro geográfico-histórico de la iglesia de España*, XXXIV, Antonéo Marin, Madrid, 1784, “El estado antiguo de la santa iglesia esenta de León”, LXX, 16, p.226.
- (28) id., *Scripta Fulgentina, op. cit.*, pp.428sq. ; id., *Berceo, op. cit.*, pp.118sq.
- (29) Herbers y Santos Noia, *Codex Calixtinus, op. cit.*, p.165 ; Bernard Gicquel, *La légende de Compostelle, Le Livre de saint Jacques*, Tallandier Éditions, Paris, 2003, p.478.
- (30) Ramírez Pascual, *Scripta Fulgentina, op. cit.*, p.433. イベリアにおけるローマ法の受容は、アルフォンソ10世がこれを基礎とする『七部法典』*las Siete Partidas* を編纂させてカスティーリャ・レオン王国の統一法としたことがひとつの契機となった。ただし実効性をもつに至ったのはアルカラ条約が締結された1348年以降とされる。
- (31) La marquis de la Grange (éd.), *Voyaige d'outremer en Jhéruusalem*, Auguste Aubry, Paris, 1858, “Voiatge a Saint Jacques de Compostelle et a Nostre Dame de Finibus Terre”, pp.143-145 ; Vielliard, *op. cit.*, pp.135sq. 以下に邦訳がある。柳宗玄『サンティヤゴの巡礼路』八坂書房、2005, pp.307sq. ; 杉谷綾子『神の御業の物語』現代書館、2002, pp.264-266.
- (32) Louis Réau, *Iconographie de l'art chrétien*, III/2, Presses Universitaires de France, Paris, 1958, p.699.
- (33) *ibid.*, p.700.
- (34) René de la Coste-Messelière et Collette Prieur, *Sous le signe de la coquille, Chemins de Saint-Jacques et pèlerins*, Centre Européen d'Études Compostellanes, Paris, 1983, p.31.
- (35) Luis de la Vega, *Historia de la vida y milagros de Santo Domingo de la Calçada*, Juan Bautista Varesio, Burgos, 1606, fol.109ro-111ro (Univeridad de Granada, <http://digibug.ugr.es/handle/10481/38717>) ; Ramírez Pascual, *Scripta Fulgentina, op. cit.*, pp.430sq.
- (36) Takeshi Matsumura, *Dictionnaire du français médiéval*, Les Belles Lettres, Paris, 2015, p.1302.
- (37) 近松洋男『中世スペイン語辞典』風間書房、1980、p.214.
- (38) Ramírez Pascual, *Scripta Fulgentina, op. cit.*, p.434.
- (39) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.191 ; ed. 1989, III, p.159.
- (40) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1972, IV, p.13 ; ed. 1989, III, p.159, n.13.
- (41) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.343 ; ed. 1989, III, p.297.
- (42) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.287 ; ed. 1989, III, 244.
- (43) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.264 ; ed. 1989, III, 225.
- (44) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.268sq. ; ed. 1989, III, p.227-229.
- (45) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.280sq. ; ed. 1989, III, p.237-239.
- (46) Ivo Correia de Melo Neto, “Peregrinos y santuarios en las Cantigas de Santa María”, *Temas medievales*, XVIII, Buenos Aires, 2010, p.52. サンタ・マリア・デル・プエルトにかかわるカンティーガにもモーロ人からの解放を語るものがある、359番は題辞に「どのように港の聖マリアが彼女の教会に巡礼に来た息子が牢屋につながれた婦人を哀れんだか。マリアはその息子をムーア人の土地に捕らわれの身となっていたのを解放して自由の身にした」
« [C]omo santa Maria do Porto se doeu dũa moller que vêo aa sa ygreja en romaria, a que cativaran un seu fillo, e sacó-o de cativo de terra de mouros e pose-llo en salvo » とある。Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III,

p.270 ; ed. 1989, III, p.229. 聖地巡礼の主たる目的としては、他に贖罪のための苦行 (penitencia) をあげることができる。以下を参照。浅野ひとみ「アルフォンソ10世の『聖母マリア賛歌集』における「巡礼」の諸相 (その1)」長崎純心大学『純心人文研究』7号, 2001, p.126

- (47) 同じくプエルトにかかわるカンティーガに海難事故からの救助の話がある。371番は題辞に「どのように港の聖マリアが帆船が難破して海に放り出された女性を救助したか」◀ [C]omo santa Maria do Porto guariu ãa moller que perigorda dũa pinaça e caera no mar▶ とある。Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.298 ; ed. 1989, III, p.256.
- (48) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.300 ; ed. 1989, III, p.258.
- (49) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.341 ; ed. 1989, III, p.295.
- (50) cantiga 391 : ms.F [laguna] ; ms.E.391, fol.350vo-351vo ; Valmar, *op. cit.*, II, pp.546sq. ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, pp.337sq. ; ed. 1989, III, pp.292sq.

付記

筆者は2020年にサンパウロ (カトリック聖パウロ修道会) から『聖母マリアのカンティーガ — 中世イベリアの信仰と芸術』と題した書籍を刊行した。これは『聖母マリア賛歌集』からいくつかのカンティーガを選んで読み解き、中世イベリアの信仰と芸術の諸相を紹介した一般書である。本稿の記述と重なるところもあるが、本稿は考察対象とした個々の作品について原文を掲載し、文献書誌に関する注記を附して学術論文としてまとめたものである。

Las cantigas de Santa María, III,
La melodía de santuarios para los romeros

KIKUCHI Noritaka

resumen

El rey Alfonso X de Castilla y León constituye un conjunto de canciones por alabanza a Nuestra Señora, llamado las Cantigas de Santa María. Se trata de una colección de cuatrocientas veinte composiciones escritas en gallegoportugués, lengua literaria adecuada para este tipo de poesía lírica de trovador medieval. Hay unos códices conservados procedente de la propio escritorio del monarca, anotados en notación mensural, un sistema musical precisa para la época. Además, se aparece rodeado en algunas de las ilustraciones de los manuscritos ricos de las cantigas. Todos estos son legados valiosos de la fe y de las artes ibéricas del siglo XIII. En la corte alfonsí que se reunieron poetas, compositores y intérpretes de distintas culturas contiendo cristianos, musulmanos y judíos, formaron parte de la agrupación amante de la ciencia y las varias artes.

Leyendo algunas cantigas escogidas para esto estudio, investigaremos las cinco asuntos siguientes : en el primero capítulo, aclarar un propósito principal de las cantigas, respecto al problema sobre el origen de la lírica europea ; en el segundo capítulo, tratarse las canciones que cuentan milagros sucedidos con la intervención de Santa María, haciendo una comparación con las obras coetáneas de la lengua vulgar ; en el tercero capítulo, tener como objetivo los versos y las miniaturas del códice en relación con algunos lugares sagrados de la Nuestra Señora y sus romeros de entonces ; en el cuarto capítulo, seguir la vida del rey llena de altibajos a través de composiciones autobiográficas ; en el quinto capítulo, remonstrarse desde el ángulo de la teología católica la fuente del culto popular sobre la Inmaculada Concepción de la Virgen, creído después con entusiasmo en las tierras española y portuguesa.

palabras clave : santa María, cantiga, gallegoportugués, música y artes ibéricas medievales, teología católica